

# ACEだより

特定非営利活動法人アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange)

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人「嬉泉」内

Tel 03-3426-2323 Fax 03-3706-7242 郵便振替番号 00180-3-357538

http://ace-jps.com/ E-mail:kenkn@tm.net.my (ケーケン) akemi@tm.net.my (アキミ)

## 東北関東大震災：友人を通じて届いたある医師のメール

マレーシアのサバ州、コタキナバル郊外で子どもの家を建てている友人(安部光彦さん CFF マレーシア)から、日本の一人のボランティア医師による 3/11 災害の現場救援活動報告が送られてきました。皆さんに読んでいただきたいと思います、ここに転載させていただきます。(以下、全文です。)

『こちらは早朝より検視官と共に遺体の検証にあたっています。既にその数、百体を超えています。塩水に浸かり全身が浮腫した遺体は重く、一様になり果てた姿です。口腔内は砂や泥に被われ、流された勢いや水圧で解放骨折や手、脚が無くなった遺体もあります。顔や頭を材木やコンクリート片でえぐられた遺体もあります。地獄絵の様な状況です。

自衛隊、地元消防、警察は必死の救助活動を続けています。今後更に遺体収容が多くなると考えられます。三日目を迎え、被災者には疲労困憊の様子が見て取れます。本当に無念な想いし浮かんできません。水一杯飲む事すら申し訳ない気持ちになります。

重機が集まり始め、これから少しずつ土砂の掘り返しが進むと思います。県警検視官と共に死亡診断書作成の為検証を進めているのが今の現状です。夕方には一旦避難場所に行き、生存者のフォローを行い、また夜再び検視に立ち会う予定です。生きていてほしい・・・本音です。しかし、この光景をご覧頂ければ正に絶望感の方が勝ってしまいます。医師として助けたいと思いここに来ました。しかし、これ程打ちのめされた経験は他にありません。無力を感じています。

ある方が「海が憎くてたまらない」と言い、ボロボロになりながら土砂、水の中に消えていった家族を探しています。涙しか出ません。かける言葉が何も見つからないんです。これが一瞬にして起こった災害の恐さなんです。

夫婦、家族、兄弟姉妹、親類親戚、恋人、友達、仲間、本当に大切にしてほしいと思います。大切な命、どうか今生きている事を当たり前と思わず大切に過ごしてほしい、そんな気持ちで一杯です。

「世界平和のために何をしたらいいのか」と聞かれた時のマザーテレサの言葉を思い出します。「あなたの近くに居る人をまず大切にしてください。帰って家族を大切にしてください。」大切なご家族と離ればなれになっている多くの被災者の方に一刻も早く幸せがおとずれますように。」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

今日、地震から6日目、灯油、ガソリン、食糧等の不足が報じられています。被災の人たちが氷点下の寒さの中で空腹に耐えているのに、一方では買い占め。酷いです。分かち合いの逆です。世界中から様々な救援・支援が届いています。マレーシアも医師たちが発ったそうです。大地震、巨大津波、原発事故が重なった未曾有の事態。人間が制御出来ない大きな力の前で、人は謙虚になることが犠牲になった方々に向かって出来る大切なことだと思います。先ず出来る援助をすると同時に、“豊か呆け”、便利や贅沢の追求一筋と決別する時ではないでしょうか。(中澤 健)

## 平成23年度 特定非営利活動法人アジア地域福祉と交流の会 通常総会のご案内

3月、思いがけない東北関東大震災が起こりました。それに伴って想像を絶する津波が襲い、加えて原発事故で、騒然としています。亡くなられた方々、行方不明の方々、被災されていらっしゃる方々の人数も正確には分からないほどの混乱状態で、私のおりますマレーシアの衛星放送 ASTRO の NHK 番組もここ数日 24 時間被災関係です。日本全国だけでなく、世界が注目し、救援を申し出、マレーシアからも医師、医療チームが発ちました。一体何時になれば見通しが立つのか、みんなが不安の今日 6 日目です。

こんな時期に6月の総会の計画をすることが心苦しいようです。が、むしろこういう時期だからこそその企画が出来ましたのでご案内致します。私たちの会としましては初めて、会員以外の方に講演をお願いしました。これは、強くその必要性を感じたからであります。是非皆さんと一緒に感じ考え学びたいと思ったからです。

マレーシアにおける活動状況の報告と共に、今回お願いしました講師は、昨年私共が沖縄で感銘を受けました伊良皆善子さんです。現在、琉球放送ラジオ、ラジオ沖縄、FM 沖縄などにレギュラー番組をもたれている伊良皆さんは、一方で、日本の固有の文化でもある"童謡"の語り部として知られています。また今回、既にマレーシアを4回訪れた小学生、瀬沼くんにマレーシアで感じたことを率直に話していただきます。

日本人の心が求め続けてきたもの、今、本当に大切な日本人の精神性とは何か、6月18日午後、一緒に考えようではありませんか。ご参加をお待ちしています。  
(中澤)

- |          |  |
|----------|--|
| 1. 日時    | 2011年6月18日(土)<br>午後1時30分 ~ 6時45分 (受付は、12時30分から)  |
| 2. 会場    | 南青山会館(農林水産省共済組合)<br>東京都港区南青山5-7-10   |
| 3. 日程と内容 | 1) 総会(13:30 ~ 15:00)<br>・平成22年度事業報告及び収支決算報告<br>・平成23年度事業計画及び収支予算案<br>・その他<br>2) 現地報告(15:10 ~ 16:10)<br>ペナン (内海 明美)<br>サラワク (中澤 和代)<br>3) 現地訪問からの報告—4年続けてマレーシア<br>瀬沼 哲歩(小学校3年生)<br>4) 講演『童謡は愛と平和のメッセージ』<br>伊良皆 善子(アナウンサー)<br>5) ティー懇親会(17:45 ~ 18:45) |
| 4. 参加費   | 1人 2,500円<br>参加費は、当日会場受付にて徴収いたします。   |

\*南青山会館は、東京の地下鉄銀座線、千代田線、半蔵門線(表参道)駅下車 B3 の出口から徒歩4分です。

日時 2010年11月13日(土) 12:45~  
 場所 沖縄県浦添市・総合福祉センター  
 ゆいホール  
 テーマ 沖縄発「ぬちどうたから」  
 ~平和を願い、一人ひとりの命が守られる社会へ  
 挨拶 村田 涼子(若竹福祉会総合施設長)  
 記念講演 「琉球歴史の謎とロマン」  
 亀島 靖氏(NPO沖縄観光協会人材育成理事長)  
 基調講演 「マレーシア・ボルネオ島からの報告」  
 シンポジウム  
 「沖縄が大切にしてきたもの」  
 シンポジスト  
 池間 哲郎 (NPOアジアチャイルドサポート代表)  
 吉川 嘉勝 (渡嘉敷村教育委員会委員長)  
 伊良 皆善子 (アナウンサー)  
 亀島 靖 (沖縄観光協会人材育成理事長)  
 中澤 健 (アジア地域福祉と交流の会・理事長)  
 コーディネーター  
 加藤 彰彦 (沖縄大学学長)



(3人のシンポジストとコーディネーター)

20万人ぐらいです。全国に4000人ぐらいのサポーターと言われる会員がいます。その方々のお力で20万の人々が支えられています。今日はハンセン病とエイズで苦しむ人々について話します。(活動現地のビデオ鑑賞)  
 ミャンマーという国は、軍事政権、北朝鮮とそっくりの国です。制限地域が非常に多い。やっとある村に到着、そこから現場に行くのですが、道がなく、泥んこ、森の中に4000名以上も閉じこめられていたのです。2000名以上の人がのたうちまわって死んで行っ

た。人間というのは、いくらでも残酷になれる。中に入って驚いた。みんなボロボロ、目が見えなくなった人、両足を切断された人、指が一本も残ってない人、そんな人ばかりです。お金がない。だからお米も買えない。くず米を食べていた。ここに私が入るのが半年間遅れたら、彼らは全滅していた。3年半前に緊急食糧援助、米、じゃがいもを半年分入れて、それ以来、食糧援助を続けている。この援助がいちばん大切です。人間がご飯を食べて生きるといふこと、しかし、このような援助を日本人からいただくことは、非常に難しい。何かをつくる、建てるという支援者は出てくる。こういう人たちにご飯をあげていますよ、と言っても心に向けてくれる方はほとんどいません。でも私は彼らを必ず守り通して見せる。人の命は誰であろうと同じです。この人々は、日本人全てが仏様だと思っている。いちばんひどかったのがルーティンパーという女性です。当時38歳、両足を切断され、指一本も残っていない。ギョロッと私をにらみつけ、「死にたい、早く自分を殺してくれ」と言った。私たちが家を建て、食べ物も提供

## ACE 地方会 in 沖縄

加藤：この5人の方々が一堂に集まるというのは、奇跡に近いと思います。今日のテーマが、全体としては「沖縄発ぬちどう室」、シンポジウムのテーマとしては「沖縄が大切にしてきたもの」、ある意味、命というのは、何か、いわばその根っこを掘ろうということですが、沖縄のこれまでの歴史、現状の中で失ってはならないもの、忘れてはいけないもの、あるいは、繰り返してはいけないもの、そういうものをしっかり私たちの中に蘇らせ、記憶の中にとどめながら日常の生活を生きて行こう、そういう意味合いが込められていると思います。それでは、池間さん、お願いします。  
 池間：みなさま、こんにちわ！アジアチャイルドサポートという民間の国際交流団体の代表を務めさせていただいてますが、この団体は、1990年に私が沖縄ではじめ、1991年11月にみんなと一緒にやろうということになりました。こういう活動は、やり続けることが大切です。今、何とか沖縄と東京に事務所を置いて、海外はネパール、ミャンマー、カンボジアに事務所を置いて、6カ国で活動しています。私たちが支えているアジアの人々は

するから一緒に生きて行こうと言ったが、「信じない」と言った。9ヶ月後、住宅が完成。彼女は大声で泣いた。その後、彼女は可愛くなった。誰かひとりでも自分のことを愛してくれるとわかった時、生きて行こうと思ったそうです。さらに半年後、おどろくことに結婚した。森の奥に小さな小屋をつくり暮らしはじめた。このような活動をする時、リーダーは、覚悟が必要。中傷なんて、そよ風だと思ふことにした。心の奥底から深い喜びを感じる。何故か、命が生きるからです。最も尊いのは命です。「ぬちどう宝」これからも私はこの活動を続けて行きます。

加藤：この活動に入ったきっかけは？

池間：フィリッピンのごみ捨て場なんですよ。11歳の少女と仲良くなって、あなたの夢は？と聞いたら、「大人になるまで生きること」と言っただけです。それを聞いて、私はこの活動を一生続けようと思いました。

加藤：今のお話、人との出会いの中で、大切なものをつかむ、そこが出発だということですね。続きまして、吉川さんに話を移したいと思います。沖縄大学に来て、学生たちと渡嘉敷島に行き、衝撃的な話をお聞きし今日につながっています。

吉川：渡嘉敷島から来ました吉川です。那覇から見ますと太陽が沈んでいくところの島です。今日ここに呼んでいただいたのは、渡嘉敷島における集団自決場から「ぬちどう宝」という母の思いで生き延びてきた私の経験を語るのだと思っています。沖縄戦は、島民の多くの命を奪い、生き残った者にも厳しい生活を強いた。私は沖縄戦で父を亡くしました。そのような背景の中に集団自決がありました。体験者として集団自決の真実を伝えようと思っています。海上船隊(軍隊)の特攻艇が海のゼロ戦として、国のために頑張る目的で島に来たのでしょうか、実際には一隻も出ておりません。自決場の近くに彼らの壕がありました。韓国からの慰安婦もたくさんいました。3月23日から沖縄に爆撃が始まり、3月27日には米軍が上陸、住民は西山壕に集められ、そこで集団自決がはじまるわけです。沖縄戦最後の頃には、渡嘉敷島住民1000名

のうち、600人以上がその場に集まっています。隠れるところはありません。雑木林です。「天皇陛下バンザイ！」と。自決がはじまるわけです。私の兄弟が「じゃあ、僕らもやるよ」と手榴弾の信管を抜いて、がらがら石で叩いたのですが爆発しなかった。そのうち、近くにいた従兄が自分の息子をおぶって逃げようとした時、私の兄が立ち上がって方言で叫んだんです。「みんな立て、従兄さんは逃げるじゃないか、生きるべきだ、みんな従兄さんたちを追って逃げよう！」しばらくして、近くに艦砲が落ちて、ものすごく大きな音がした、親父がうーんと言って、ものすごい血を出して死んだ。家族には内緒でこのことを県民大会で話したのですが、たまたまラジオで聞いていた姉が、「お前は大事なことを言い忘れただろう、お母さんが、ヤーサぬちどう宝と聞いたことを」。私は、母の「ぬちどう宝」の思想で今の私があるのだということをおみなさんにお伝えしたい。

加藤：今、私たちに話をしてくださる吉川さんのお母様が、もう自決しないといけないという最後に「ぬちどう宝」と言って逃げた。そのことがあり、今、私たちがお話を伺えるのです。あの状況下で生き抜くには、しっかりした信念と勇気が必要だったことでしょう。その背景は、渡嘉敷島の長い歴史の中で培われた文化とそれを受け継いだお母様や吉川さんの生き方につながる思想があると思われされました。では伊良皆さんお願いします。

伊良皆：私は1945年10月6日生まれ、やんばるに疎開してやんばるの山羊小屋に生まれました。戦争のことはよく知らないのですが、戦争体験をされた吉川さんの話は胸を打ちました。私は、アナウンサーになって41年になります。20年前から北海道から鹿児島まで全国各地の童謡の故郷をたずねて取材をしております。仕事に恵まれなくて、もんもんとしている時に童謡に救われました。いちばん最初に取材したのが茨城県の野口雨情の故郷です。野口雨情が童謡を書く時の姿勢は、地球上の全てに深い愛を注ぐのです。代表的な童謡が「七つの子、からす何故鳴くの？」からすというのは、昔から忌み嫌われている

鳥なんですね。真っ黒で不吉で嫌われ者の代表選手を主人公に据えたというところがすごい。カァカァという私たちには不吉に聞こえるあの鳴き声、童謡詩人には何と聞こえたのでしょうか。みんなが嫌っているあのからすも親がらすがいて子がらすがいる。子がらすが可愛い、可愛いと聞こえたのです。童謡は、醜い感情も愛の炎で包んでしまわなければならないのです。これがきっかけとなり、簡単な童謡の中に作者の波瀾万丈の人生や信念があるということに気づきました。愛と平和のメッセージもいっぱい出てきます。童謡の言葉が一般的になったのは、大正7年から昭和11年まで16年間、鈴木三重吉の呼びかけにより、子ども向けの本「赤い鳥」が発刊されたことにはじまります。全巻197冊出ています。当時、鈴木三重吉は、世の中に氾濫している子どもの本は功利的で刺激的、センセーショナルなものが多い、これが子どもに影響を与えらると思うと苦々しく思う。自分たちは、子ども向けに良い童謡本を出して行きたいと言っています。今はもっと良くない本



(みなさんの話題に魅せられた会場)

が売られています。野口雨情が87年前に「童心をもぎとられた子どもたち」という表現をしていましたが、私もそう思います。子守歌を歌うと今の子ども達が拒否反応を起こす、今の子どもたちは短調のメロディーに慣れていない、短調のメロディーをおろそかにすると「慈しむ、哀しむ、哀れむ」心が育まれず、切れやすくなると言います。「ぞうさん、ぞうさん、お鼻が長いね、そうよ、母さんも長いよ」これは「母さん大好き」という子どもぞうさんからのメッセージなのです。

加藤：アンデルセンが「人生はいちばん美しい童話である」と言い、寺山修司という詩人が「涙は人間のつくることのできるいちばん小さな海です」と言いました。海は全てを生み出す母ですね、沖縄から何かが生まれたら嬉しいな、と思っています。それでは亀島先生にお願いするのですが、先生、私のこと覚えてますか？先生が歴史とロマンの旅をずっとやっておられますよね。私、家内と一緒に参加をしております。中でも、沖縄の人は海洋民族ということで、アイデンティティーがはっきりしてるなと思うのですが、沖縄の島文化のもってる意味も大きいですね。さき程、ご講演の中で話しきれなかった部分、アイデンティティーとぬちどう宝、命というものを琉球人がどのように考えていたか、ということなど、よろしくお願いします。

亀島：歴史を海から見ると、全然ちがったものになる。私は琉球の歴史をこの視点で見ることになっているが、沖縄が琉球王朝から現在に至るまで徹底してきたのは「血」だと思う。血というのは、つまり、先祖崇拝。私たちの体の中を流れている血、DNAという表現もされますが、沖縄は中国の道教が来る前から、本土で言う鎮守の森のようなものを信仰した。村をつくる人が根人（本家）で、小高い山を探す。その前、つまり南側に自分の家をつくり、隣に、自分の姉妹の住む家をつくる。これをくうない神（女性は生まれながらにして神様である。その神は自分の男兄弟を守る。亭主は血がつながっていない他人だから守らない）として大事にする。血族を大切に、これは母系社会の特徴の一つです。自分の姉妹が側に住み、人口が増えると、南（海）に向かって広がるとというのが沖縄の発展の仕方なんですね。自分たちの村を守る神様を造りあげる場所、これが北風を防ぐ小高い丘になる、これが「ウタキ」と呼ばれるものです。昔、お墓のない時代、そこに先祖を葬るわけです。ここを拝んでるうちにだんだん、そこが地域を守る神様に変化していく。沖縄では、先祖を村の全体の守護神として守る、女性が神と男性社会の仲介役をするという形になり、先祖を大切にします。沖縄の伝説、巷説で

も、先祖の血をゆがめるということを非常に畏れる。血を大事に継承していく。結果として目上の人を大切に、長老が社会のリーダーになっていく。人々はいろんなことを長老に問い、相談する。長老の人は社会で必要な存在になる。つまり、お互いに必要な関係となり、血をベースにした先祖崇拜と地域のまとまりが続いていく。これは、沖縄に継承されている遺産だととらえています。また、



(沖縄に伝わる民族舞踊・名手の踊り)

海洋民族は、飛び出していく勇氣がある。照明のない時代、真っ暗闇の海に飛び出していく。昔、中国に行くのは水杯をして命がけで行くんですね。また中国から、琉球王の戴冠式などで琉球に向かう場合、南中国から出る時に、自分と同じサイズの棺桶を用意する。海賊におそわれる、遭難する、そういった時には、その棺桶に入って死を待つぐらいの覚悟をして来るのです。海は地獄であり天国である。そこに飛び出していく精神、勇氣、これを「うちなんちゅ」のチャレンジ精神だと思うわけです。自分たちは遠い南太平洋から塩にのってやってきた、これが DNA になって残っている。沖縄の人々には、海に対するチャレンジ精神があり、これが後に琉球王国がつかむ文化遺産となり、あるいは、外との交流や歴史によって生まれる様々のものを支えている。海洋民族の自由に動き回るコスモポリタン精神があるということです。

加藤：今、お話の中で海洋民族は、ある意味、平和というか、何でも受け容れる、そういう

ところがあると同時に、チャレンジ精神、勇氣とか、コスモポリタン、自由をもっているということですね。ちょっとここで池間さんに聞いたかったんですよ。うちなんちゅとしての性格をどうお感じになったか…。

池間：亀島先生からチャレンジ精神という言葉が出ましたが、私は、今の沖縄県民はチャレンジ精神を取り戻すべきだと思っています。私は今、東京に住んでいますけど、沖縄は考えないといけない。いつまでも自画自賛ばかりやっていると、駄目なんです。私のまわりに 30 代 40 代の経営者が集まってくるんです。いつも沖縄の若手の経営者が、沖縄を愛するのであれば、感情で見えてはいけません。数字で一生懸命やらなくてはならない。今の沖縄いいと思いますか。みなさん、あらゆるワースト記録ですよ。飲酒運転、性犯罪、離婚率、破産率、それで何故、いいところなの？と私は言いたい。取り戻さないといけない。元々の沖縄のいいところを。いちばん疑問に思っているのが、何故、沖縄の子どもたちが日本国最下位の学力と体力を何十年も続けているか、ということ。沖縄社会は甘いんです。もっともっと自分に厳しく、本気でやれば、子どもたちは、わかるんですから。だからこそ、今この琉球の民の心を取り戻すべきと私は思っている。

加藤：興南高校が今回、優勝しましたよね。これ、すごいことですよ。相手の練習量もすごいですよ、が、勝った！この辺、池間さん、どうですか？

池間：久高島では、海で亡くなった人の葬式をしない。南太平洋でも海で亡くなった人のことを亡くなった、とは言わない。帰って来ないと言う。自分たちの先祖がどこか漂流して生きながらえたかも知れない。その人たちの血を引いた人たちが今、久高に来ているかも知れない、あるいは、帰ってくるかも知れない。つまり、その人たちを常に平和をもって迎える、そういうものと、外に出ていく人に対して非常に親近感を覚える。そういう意味でチャレンジ精神が DNA として生きている。今、世界のうちなんちゅが 30 万人いると言われている。これは単に貧乏で海外に行

ったのか、というとそうじゃないですね。海洋民族の人は、海を越えて外に行くということについて、あまり抵抗感を感じない。私はこのことについて、もう一回目を向けてみる必要があると思いますね。

加藤：平和をつくる、平和を維持するというのは、相手を受け容れる、というだけでは無理で、今日のお話にあったように、本気でチャレンジするということがなければいけない。沖縄がもっている本物の魂に気がつかないといけない。今日、はじめてお会いしたんですけど、中澤さん、日本の福祉活動をしていて、何故マレーシアでお仕事をしようと思ったのか、先程、言い忘れたところ、もしかすると池間さんとダブルところもおありかと、そういうところもお聞かせ下さい。

中澤：今日のこの「沖縄が大切にしてきたもの」というテーマで私は、何を話したらいいんだろう、と思ったのですが、海洋民族のチャレンジ精神、あるいは、インドネシア語(マレー語圏でよく似ている)と沖縄の言葉など、南方から黒潮にのって来たんじゃないか、というお話がでてましたが。実は、日本人の元はイバン族が上って行ったんだという人もいます。今まで沖縄は何度か来たことがあるのですが、はじめてお聞きすることが多くて、考えさせられています。私はこの3,4日滞在させていただいて、感ずるのが「おもてなしの心」なんですね。イバン族の人たちと生活習慣、言葉、遊び、発想の仕方などに似たところがあるのですが、中でもいちばん強く感じるのは、外部からの受入であり、おもてなしの心だと思っております。居心地の良さ、人との絆が大切にされている、そのあたりの共通点を探るということも大切だと思います。ちょっとイバン族の暮らしを紹介させていただきますと、生活する場所は、熱帯赤道直下のロングハウスという長い家です。単に長屋と言っても少し違うのは、家の前に長い幅7メートルぐらいの廊下が続いています。この長い廊下が彼らにとって、仕事の場でもあり、子どもたちの遊び場でもあるし、会議の場所でもある。何かあった時には、宴会やダンスの場にもなるという廊下です。雨の多

いところですから、だんだん、この形式が整ったのではないかと、思います。学校だけではありませんが、電気、水道、社会資源的なものはまだないところが多い。自然とともに暮らしているのです。自然というのは、良いこともあるけれど、大変なことも多い。彼らは時々、集まって一緒にゴトンロヨンという作業をするのです。沖縄でも結いという言葉がありますが、一緒に助け合い、喜びを分かち合う。外から来た人たちも大事にする。日本からワークキャンプに来た人たちなどへも心から歓迎するのです。すぐ兄妹だ！という風にうち解けます。活動をはじめる前に私はロングハウスの調査をしたことがあるのですが、その時に帰ってきた言葉が、「イバンの伝統を守りたい」ということだったんですね。自然、言語、暮らしに関して誇りをもっています。自然の中でいろいろ工夫して暮らすという生活力があるんですね。しかし、最近は携帯電話やテレビなどの普及で古い生活様式は変化してきていますが。まあ、しかし、沖縄の人々と共通したもの、居心地の良さや人との絆を大切にするとところなど、やや壊れかけたものを取り戻すという意味で本土の人々に沖縄から発信できるのではないかと、いう気もしています。

加藤：今、中澤さんのお話を伺いながら、日本も含めてアジアとしての琉球を考えますと、おそかれ、はやかれ、いずれは近代化するわけですね。その中で、何を守り、何を大事にするかが問われますね。沖縄は最も貧しいところですが、チャンプルというのは、混ざり合うということです。アジアは、どこのみなさんとも、一緒に生きられるという実感があり、これからも交流したいと思っております。中澤さんの活動がより発展しますように、また池間さんの活動がもっともっと子どもたちに夢をともすよう、生きる勇気をもたらすように祈っております。短い時間でしたが、心に響くお話をたくさんいただきました。ありがとうございました。

☆☆☆☆☆☆☆☆

紙面で全てをお伝えできません。充実した時間と貴重なご意見の数々、感謝しております。(要約・文責：中澤和代)

## ◆◆◆◆ ペナンACS近況 ◆◆◆◆

マレーシア首相夫人

ステッピング・ストーン作業所訪問

内海 明美



(作業の様子を見学するマレーシア首相夫人)

2011年1月27日 Puan Sri Rosmah Mansor 首相夫人はペナン州のNGOへの寄付贈呈のため、贈呈式開催会場にACSのStepping Stone作業所が選ばれ訪問されました。

この訪問は1月初旬に決定され、そのための準備をわずかな期間で執り行いました。地域住民委員会、特にPulau Betong村選出の県会議員Farid氏の協力を得てさまざまな連絡が行われ当日を迎えました。予定された参加者は1000名、日ごろは広々と感じる作業所もたくさんの

人たちで会場が満たされていました。関係者、ACSスタッフは落ち度のないように再点検をしながら時間を待ちました。その中で作業所の利用者も緊張しながら各自の出番を確認。11時にPuan Sri Rosmah Mansor夫人がカメラマン、テレビのクルー、新聞記者、警察官(特別警護)たちに囲まれて到着。作業所の利用者代表が花束を手渡しと順調にいくように思われました。が、利用者代表 Raziah さんが夫人をハグしました。夫人はとっさのことでしたが受け入れられ心温まる歓迎となりました。その後、ペナン州のNGO 35団体への寄付贈呈が行われ、作業所見学となりました。さおりの部屋では利用者が夫人の質問に直接答え「すばらしい、がんばりますね」とのことばかりをいただいたのでした。あまりにたくさんの人たちで利用者の作業を充分に見学していただけたらと思うのですが、何しろ超有名人、VVIPの訪問会場として選ばれたことはACSとしても大変名誉なこと。利用者、職員ともに力が入りました。またこの日Sibuから中澤先生が来訪。写真撮影をしてくださっていましたが夫人が空港に立たれる際ACS創立者であると紹介されました。

## ◆◆◆Muhhbah トピックス◆◆◆

◎今年4月から、RCSが運営するデイセンターの正式な名称が"PDK Pusat Muhhbah"となります。これは、マレーシア政府が主導するPDK(英語では"Community Based Rehabilitation"のマレー語訳の頭文字)とRCSとが連携して活動することを意味します。これにより、年間運営費の20%程が州政府から支出されるようになります。

## ◆◆◆ ACEニュース◆◆◆

◎私たちの会のホームページが、全面的に新しくなりました。是非一度覗いてみてください。アドレスは、<http://ace-jps.com/>です。妻和代と娘京子の手づくり努力作です。私のブログもあります。のぞいてください。(健)

## ◆◆◆編集後記◆◆◆

◎日本の巨大地震と津波、今号編集時点では、まだ余震が続き、原発も危険です。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

◎11月に開催しました「ACE 地方会 in 沖縄」は、地元のみなさまのおかげで、とても刺激的なよい会になりました。紙面に掲載できなかった記念講演「沖縄の歴史とロマン」やエイサー踊り、さらに翌日の番外編、普天間や辺野古、嘉手納の基地めぐりからは、多くのことを学ぶ機会となりました。ワークキャンプはまもなく10回目の実施となります。こうして支援してくださる皆さまのおかげで、2010年度も無事に活動を続けることができました。

(中澤 和代)